

現代詩の
鑑賞と
創作のために



伊藤信吉＋井上靖＋野田字太郎＋村野四郎＋吉田精一編
詩とは何か

「詩とは何か」との問いは、しょせん永遠の謎解きに近い。

しかし、多少とも詩ごころを有する者にとつて、それは常に念頭を離れえぬ幻の課題である。

「シンボジウム・詩とは何か」で始まる本書は、まさしくこの神秘的謎に挑戦する一つの果敢な実験にほかならない。

この課題にその生涯を悩まされ続けてきたであろう詩人や学者たちが、

どのようにその正体に迫りうるか、「読を請うゆえん」である。



角川選書

詩とは何か

昭和五十一年三月二十日 初版発行

編者 — 伊藤信吉+

井上靖+

野田宇太郎+

村野四郎+

吉田精一

©Shinkichi Ito etc.

Printed in Japan



発行者 — 角川春樹 発行所 — 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三三 郵便番号二〇二

電話東京三三三六二二(大代表) 振替東京三一五〇六

装幀者 — 杉浦康平 協力 — 鈴木一誌+杉浦富美子

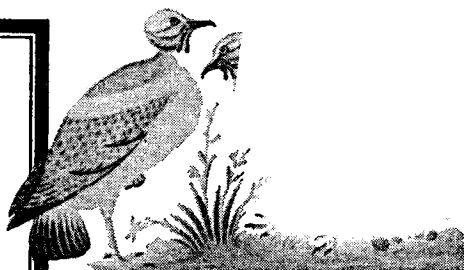
印刷所 — 暁印刷株式会社 外装印刷 — 旭印刷株式会社

製本所 — 株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

0392-703085-0946(0)



伊藤信吉＋井上靖＋野田字太郎＋村野四郎＋吉田精一編
詩とは何か

*

詩とは何か

編者

||

伊藤信吉 + 井上靖 + 野田宇太郎 +
村野四郎 + 吉田精一

目次

一部——詩の本質——七

第一章——シンボジウム・詩とは何か——司会

小海 永二
大岡 信
田村 隆一
宗田 左近

第二章——近代詩の来た道——三

伝統詩と近代詩——吉田 精一——五

西欧詩と日本の近代詩——飯島 耕一——七

近代詩の誕生と終焉——壺井 繁治——六

第三章——現代詩の世界——一〇一

現代詩とは何か——清岡 卓行——一〇三

現代詩のレゾン・デートル——黒田 三郎——二七

現代における抒情の意味——秋谷 豊——二七

第四章——わが主張——
一四

意味への意志——鮎川信夫——
一四

私の詩作ノート——寺山修司——
一五

現代社会と詩的喩法——吉本隆明——
一六

ある演説から——田村隆一——
一七

二部——詩作のために——
一五

第一章——詩とつきあう法——
一七

詩的ものの見方——会田綱雄——
一八

わが詩とのつき合い——小海永二——
一九

詩と人生——岡本潤——
二四

第二章——詩と表現——
三〇

詩にとってことばとは何か——村野四郎——
三〇

詩と日本語——大江瀧雄——
三一

詩のレトリック——安西均——
三二

詩とイメージ——中桐雅夫——
三三

第三章——詩——そのフォルムとスタイル——鈴木 亨——二六

第四章——作詩の手がかり——三三

観察と経験と想像力と——粟津則雄——三四

知性と感性——小野十三郎——三四

モチーフとテーマ——木原孝一——三三

第五章——わが詩作のあと——三四

剃刀と林檎——西脇順三郎——三四

私と詩——金子光晴——三四

日本と中国とにまたがって——草野心平——三六

荒廃の季節とわが詩作——小野十三郎——三八

参考文献——佐藤房儀編——三九

選書版解説——吉田精一——三七

一部 詩の本質

第一章——シンポジウム・詩とは何か

出席者

司会 小海 永二

大岡 信

田村 隆一

宗左 近

(発言順)

編集部 お忙しいところをお集まりいただき、たいへん

ありがとうございます。本日のテーマは「詩とは何か」という茫漠^{ぼうもく}としたものですが、できるだけ、平易、具体的にお話しいただけると幸いです。さっそく、お願いいたします。

詩人と読者の間

司会 最近、詩のブームということで、なにかにつけて詩についての話題が新聞などにもとりあげられるようになりました。しかし、こうした風潮については、詩人の側からすれば必ずしも快しとしない向きもあるようです。たとえば、昨年、ある出版社が企画の宣伝を兼ねて一般から詩を募集したことがあります。予想にたがわず、応募作品は数万点に達したといわれますが、当時、審査に当たった村野四郎さんは、一般的傾向として、それらはあまりにセンチメンタルでとても詩とはいえない、という感想をもらされ、詩人の詩作はもっと真剣なものなのだから、一般の人人も、詩というものをもっと真剣に受けとめてほしい、といった主旨のことを発言しています。この発言については、

読者の側からもさかんに反論めいた意見が出たものです。

こうした点について皆さんのご意見をうかがうというところから、このシンポジウムを始めたいと思います。まず大岡さんからいかがでしょうか。

大岡 口火を切る意味で感想を……ぼくは村野さんの意見は、たしかに詩人としては非常に当然の意見だと思うんです。けれども、そういわれた側からいえば、村野さんの発言に対してはやっぱりいろいろと言いつ分があつただろうと思いますね。てっとり早く理解していただくために、自分自身に即して、ものをいうことになりましたが、ぼくが詩をよみはじめたころは、今から考えると、やはりものすごくセンチメンタルだったように思うんです。おそらく、ここにいる田村隆一さんだってそうだったろうし、宗さんだって、小海さんだってそうだったと思うんですね。センチメンタルであるということを警戒しはじめるといふのは、いつてみれば、相当程度、文学の毒にそまってしまうってからのことですね。だから初めは、大なり小なり、素朴な意味でのセンチメンタリズムが、基本にあつたっていいと思うんです。

そんなわけで、ぼくらが詩をよみはじめたころ、つまり

少年時代というか、思春期前期ごろというのは、自分の中にあるわけのわからない欲望とか希望とか、あるいは観念とか、といったものが、まだ混沌未分のままだに存在しているうまく処理できない段階なんですね。そういう段階には、いろいろなことについて、秩序だった整理のしかたができないから、それを自分で受け止める時に、いわゆるセンチメンタルな受け止め方になるということは大いにありうることなのです。ぼくの見るところでは、詩をよむ少年というのは、昨今一般に思われているほどには多いと思えないのですが、いわばそういう限られた少年たちが、いったい詩に何を求めているかというと、彼らの中にある、ある種のセンチメンタルで、感性的な精神の状態を、詩人の詩の中で浄化することによって、秩序立てようと無意識的に努力しているのではなからうか。村野さんが祖上（むかしより）にのせた人々とは、まさしく、そういう層じゃあないかという気がするわけです。彼らは彼らのセンチメンタリズムを、詩をよむことによって、彼らなりに切り捨てていこうとしているわけで、彼らは、いわばそういう過程にある人々だともいえるわけです。要するに詩をよむ、また作るということの中には、意識的にせよ、無意識的にせよ、センチメンタリズム

を克服するという非常に大きな浄化の過程があるわけで、その意味においては村野さんのセンチメンタリズム論は、あまりにも正論にすぎ、彼らにとっては、いささか不服だったのではないかとも思うのです。当然なんですけど、そこから脱却しようと努めながらも、やむをえずセンチメンタルイズムの渦中にある、というのが彼らの実態だとすればそう簡単に、その患部を切り捨てよ、といわれても困るのではないか、ぼくは、この問題をそういうふうに理解したいわけです。いつのことだったか、ぼくはたまたま田村隆一さんの少年時代に作られた非常にセンチな詩を見たことがあります。その時、これが、あの厳正なクラシック詩人田村隆一の詩か、と驚いたのですが、皮肉ではなく、同時に、とても心たのしく感じたものです。（笑い）

そんなわけで、詩人だからといって、なにも初めから普通の人とケタはずれに違う詩才を持ち合わせているわけではありませんし、逆にいえば、その出発点に、いささかセンチなひびきがあったとしても、それほど重視したり慨嘆したりするには当たらないのではないかという気がしますね。

田村　そうですね、ぼくも大岡君とほとんど同意見です。

大岡君の本当の真意は、だから村野さんの意見と読者の意見とは別に対立するものではない、というところにあるようですが、そのとおりですね。大岡君のいうように、根っからの詩人なんていない、という意味では、村野さん自身だって、おそらく当初はセンチメンタリストだったと思うんです。だとすればセンチメンタルであるということは、むしろ詩の世界にはいっていく一つの重要な資格だと思っ
ていいんじゃないかと思えますね。村野さんのような一流詩人にして、そうであったということが許されるならば、センチメンタル万々才といつていいかもしれませんね。

司会 宗さんは、お二人の意見をどのように考えられますか。

宗 お二人のおっしゃるとおりです。ただ、ぼくにいわせれば、ぼくらの若い時代には、幸か不幸か、村野さんに叱られようにも、そんなチャンスすらなかったんですからね。若気のボロを出そうにも、そんな機会すら与えられなかった、といったほうが適當ではないんですか。

ちょっと前に聞いた話ですが、ある化粧品メーカーのPR誌で詩を募集したところ、何万通という作品が集まったとのことです。さっきの出版社の公募の話といい、要する

に世はまさにアマチュア時代なんですよ。そして、流行歌の世界などでもそうですが、今日ほどプロとアマチュアの接近している時代はありません。

一般人による作詩人口の広まり、これは誰がなんというとも隔世の餽^{すそ}があります。裾野が広まれば、六合目以上は、なんたつて水準が上がっていると見るべきです。決して質と量を混同するつもりはありませんが、当節は、プロがあまりプロ面をして、うかうかしてはいられない、ということをつけ加えて、お答えにかえておきましょう。

詩に求めるもの

司会 いま、宗さんからお話がアつたんですけれど、結局、事実として、読者層の拡大といえますか、少なくとも以前よりは、詩の読者数がふえているという現象はあると思うんです。それはなぜかということですね。ただ自然とふえているということではないと思うので、それにはそれなりの理由があるだろうと思うんです。その点についてはいかがでしょうか。

大岡 そうですね、このことは結局、現代社会のあり方

と、密接な関係のあることだと思ふんですね。詩というのは、つまるところ社会の中で生きている人間が書いたり、読んだりしているわけですから、当然といえば当然なんですけど、現在、特にそういう傾向が見られるということは、ばくにいわせれば、やはり、社会的な制度のあり方と密接な関係があるといわざるをえませんね。社会制度などというのと大仰だが、さしあたっていえば、会社組織などが、いい例になるでしょう。上下の身分関係その他、その中ではすべてが、きつちりとしまっていて、とにかく若者にはたいへん息苦しい。大学なども例外ではありません。教師と学生などといった人間構成も、あまりきちんと序列がつけられれば、かえってその虚構性があらわになり、制度自体への疑惑が生じてくるでしょう。あるいはまた観念の世界でも同じことがいえそうです。イデオロギーという名のいろんな観念的制度がそれ自体で権威性をもつてくると、人間の内なる自然がそれに反逆し、束縛を破ろうとして新しい表現を求める。いってみれば、息がつまって苦しい、どうか窓をあけてくれ、といったぐあいなのです。いわば押えつけるものへの、ごく自然な反撥力というのが人間のうちに発生します。そして、それはさまざまな形で突破口を

見つけたそうとするわけですが、詩を求めようとする意欲も、ばくにいわせれば、明らかに、そうした反撥力の一つのあらわれだと思ふんですね。そうした意味では、ことはただ詩に限られた問題ではありません。まぎれもなく、現在では美術とか音楽とかいった芸術の諸領域にも全く同じ問題があるんです。たとえば、ゴーゴーだとかグループ・サウンズだとか、あるいはサイケ調の感覚体験だとかいった風俗現象にもそれがあるでしょう。要するに、それは反抗形式の違いなのであって、固定化された制度的なものに對する、ある種の反抗みtainなものね。そういったものが底流としては今日の芸術一般に一貫してあると思ふんです。昨今における詩のいわゆるブームの背景には、やはりそういうことが大いに関係しているのではないかと思いますね。

司会 田村さん、詩のお話なかなかすることがあるわけでしょう、講演会なんかで。そういう場合の聴衆の反応といえますか、そこらへんで今までと違った新しい手ごたえを感じるがありますか。

田村 わたしが、近代文学館でやった詩の講座の時には、圧倒的に婦人が多かったですね。しかも、婦人の中には、もちろん若い人もいましたけれど、主軸をなしたのは、む

しろ家庭の主婦だったように思います。その反応のしかたには具体的にどうこうというほどのものはありませんでしたけど、とにかく非常に熱心であったことは確かで、詩に對する関心が、これほどまでに……という実感を直接、肌で感じる事ができましたね。ほとんど熱氣に近いものを感じた、といってもいいくらいで、その点、大岡さんのいったことにほとんど異存はないんです。ですが、昨今の詩への関心ということの中には、遠因として、もう一つ戦後の学校教育が果たした役割というものがあると思うんです。つまり義務教育に詩が教材として、とりあげられたということですね。

それから、更にもう一つは、今の若い人たちのリズム感覚ということがあるでしょうね。若い人だから、いきおい、何事につけて非常に過敏だし、また特有のエモーションがあるんですが、それを何らかの形で、常に外へ出していきたいと思っています。昔だったら、さしずめ短歌とか、俳句とかいった形の整った伝統的な詩があつて、それに託するところなのでしょうが、今の若い人たちのエモーションというものは、そういう伝統的なリズムとは合わないわけですね。といって、戦後社会のもつリズムも、なんとなく

それにマッチしない。そこで、おもむくところは、おのづからフリー・ベースというか、自由詩形の詩のほうにいくんじゃないかと思うんです。

司会 宗さんの場合は、詩が求められている理由について、どうお考えですか。

宗 お二人から先に何もかもいわれちゃって、あまりいわなくてすむから、たいへん気が楽なんですけどね……。 (笑い) だから、田村さんと、大岡さんがいわれたことに、全く賛成といった上で、もう一度、その現象面を具体的に補足するところからしゃべりましょうか。ぼくの友達であり、皆さんの友達でもある清岡君ね、あの清岡卓行さんが、ある時、私の勤めている学校で、現代詩講座をもったことがあるんです。彼は……、ちょっと描写的になっちゃって悪いかな、(笑い)とにかくその時、彼は目を伏せて、教室にはいつて行つたそうです。そして、ややあつてから、さて、と思つて、ひょっと目をあげると、なんと、まぶしいばかりの超満員だったそうなんです。それもね、彼のことばどおりにいいですよ、じつに九割がたは、若く美しい女性だった、というので、彼は八十分ですむところを、思わず九十分もやっちゃったというんです。(笑い)